

海軍

ラバウル駐屯

海軍第八通信隊

静岡県 田中秀一

昭和十六年真珠湾攻撃の戦果大、大東亞戦争勃発、南太平洋水域においては戦況ますます拡大し、ついに日本国内においても学徒動員、国民皆兵と戦争一色になつてまいりました。

昭和十七年、稲取実業学校入学、同年私は一生を君に捧げるつもりで海軍通信兵に志願しました。同年九月三十日試験合格、横須賀武山第二海兵団に入団しました。

海兵団での教育と生活の概要は次のとおりであります。

- 一 精神教育、軍人に賜りたる勅諭、訓練、訓示
- 二 訓練、艦砲操法、陸戦、短艇、信号手旗モース訓練
- 三 勤務、隊務、軍歌、号令、演習、法令日課、銃器点検
- 四 体育、武道、銃剣術、水泳、体操、相撲
- 五 学術教育、航海術、砲術、通信術、衣笠園油台へ行軍

四時半入浴、五時四十六分夕食、六時四十五分より九時十五分兵舎内の掃除、九時半巡検用意、九時四十分五分巡検、就寝。以上が海兵団においての一日の生活でした。

昭和十七年十月三十一日、第二海兵団を退団、同日横須賀海軍通信学校入学、電信電氣に関する基礎教育、暗号電文の作成および翻訳、攻撃精神を養うための棒倒し、行軍など毎日の特訓でした。そのうちでも土曜日の外出、故郷の父母との面会が楽しみでした。

昭和十七年、官房機密第七三一〇号により同十八年三月一日、海軍通信学校練習生教程を卒業、即日横須賀第一海兵団に仮入団を命ぜられました。三月十九日退団、昭和十八年三月十九日、横須賀軍港より南東方面に出撃することとなりました。

私は海兵団において最後の昼食をすませ横須賀港に戻り、埠頭において故郷の父母あてに急いで便りを書きました。

「父上様、母上様、これが最後のお知らせとなります。十五年間ご心配をかけました。申し訳御座いません『親思う心にまさる親心』必ず御両親様には、朝な夕なにあるいは、寒さ暑さにつけ私の身を案じておられることと思いますが、お陰様で御先祖様をはじめ、御両親様の御加護によりまして元気旺盛、軍務に精励

致しております。御安心下さい。決戦場に出撃したからには生きて、再び、故郷の地を踏もうなど毛頭考えません。今度、皆様に会う日は必ず九段の桜花咲く下であろうと思います。また、村の皆様には、数々のお世話になりました。厚くお礼申し上げます。」

昭和十八年三月十九日、横須賀軍港より、約二キロ沖合に停泊中の空母「雲鷹」に乗艦、駆逐艦二隻が護衛、出港用意の命が艦橋よりあり、静かに錨を上げる音がしました。

全員が甲板に集合し、艦内より『海ゆかば水漬くかばね、山ゆかば草むすかばね……』の軍歌が吹奏されました。甲板上はそれぞれ艦上から手を振る人、帽子を振る人いろいろでした。

さらば母校よ故郷よ、住み慣れた横須賀の町、水面にぼっかり浮かぶ三浦半島の山々を後に、母艦は静かに太平洋を南下しました。行けども行けども見渡す限り水平線ばかりでした。

マリアナ群島に続いてサイパン島を過ぎたころより、温度が急上昇してきました。三〇度から四〇度ぐらい

となり、全員が夏服に着替えました。空母はジグザグ航行、時速二〇ノットで南下しました。南下するにつれて海水の色も美しさを増してゆき、ほんとうに綺麗になり、南十字星も美しく輝き、昼間のような航海が続きました。ポナペ島、ヤップ島、グアム島と太平洋を南下しました。

横須賀港を出港した五日目の朝、霧に霞んだトラック島が前方に姿を現わしてきました。母艦は一五ノットに減速し、静かにトラック港に入港しました。港外には日本海軍が世界に誇りとする戦艦「人和」が停泊中でした。艦首には大きな菊の御紋章が燦然と輝いていました。トラック基地からは陸攻機が轟音をたてて出撃していききました。我々は「雲鷹」より下艦、「旭東丸」に乗船、太平洋の南下を続けました。カロリン島、ビスマルク島と南下し、ラバウル基地に向かいました。昭和十八年三月十九日、最前線基地といわれたラバウル港に入港しました。南国の太陽は熱く、頭上から照りつけ、焼けつくような暑さでした。気温は三〇度から四〇度と上昇していききました。横須賀を出港して

十日間、五千キロの航海でしたが、皆元気で張り切っていました。右手前方には花吹山、海岸には椰子の木が立ち並び白い砂浜が続いていました。青々と繁ったマンゴリーの並木通り、港内には、いつの爆撃か分からない黒く焦げついた船舶の残骸があちらこちらに見受けられました。カヌーで二人の原住民が近づき手を振っていたのが印象的でした。戦地とは思えない静かな港でした。船長より警報が発令にならないうちに上陸してくれとのこと、急いで下船、「旭東丸」の内地への航海の無事帰国を祈りました。

昭和十八年三月二十九日、ラバウル海軍第八通信隊に無事入隊、兵舎前に集合しました。海軍大佐石川司令、通信長と訓話が続きました。

「本日、諸君は海軍第八通信隊に入隊したが、ここは海軍の南東方面の最前線通信基地及び航空基地である。諸君はこの一大決戦を勝ち抜くため、帝国海軍の名に恥じないように努力して欲しい。ガダルカナル戦から航空機の被害が急増してきた。米軍がガダルカナルへ来攻した昭和十七年八月七日朝から、ラバウル海

軍基地にいた航空部隊は、陸攻（双発陸上攻撃機）六十六機、零戦四十七機、急降下爆撃機九機をガダルカナルに突入させたが、被害甚大であった。また、ラバウル上空は、毎日敵機が来襲し爆撃がある。電信兵の任務は非常に重大であるので頑張って欲しい」との訓話でありました。

日課は、当直、非番直と四交替で勤務することになりました。毎朝五時半起床、室内掃除、十二時昼食、四時半入浴、六時夕食、九時半巡検用意、九時四十五分巡検、就寝で日課は終わります。

勤務は、ラバウル基地内の航空艦隊司令部、警備隊、潜水艦基地司令部等、各関係の電報の発信受信等、暗号員は、各艦隊司令部の作戦計画および作戦命令等を戦略常用暗号書で暗号化し電波にのせて送信するものです。

着信電報は戦略常用暗号書により翻訳し、電文に直して、通信長の検閲を受け、各関係司令部、参謀、幕僚、司令、司令長官と順次届けて行くのが通信隊員の任務でした。

連合艦隊司令長官・山本五十六大將が、昭和十八年四月十七日、ラバウルに進出して来ました。その時、言葉を交わしたのが、私の一生の思い出となりました。

昭和十八年三月三十日、私の当直第一日目、張り切って電信室に入りました。前任者より引き継ぐと同時に至急電報が巡ってきて緊張しました。そして翻訳を急ぎました。発信はセントジョーン基地より「B 29、二〇機ラバウル方向に向かう〇八〇〇」。至急艦隊司令部に通報したと同時にラバウル全域に空襲警報が発令され、司令部のサイレンが鳴り響きました。全員が防空壕へ避難する暇もなくすでに敵機は寝姿山上空に姿を現しました。地上からは一斉射撃が始まり、ラバウル上空は一面轟音と弾幕に覆われました。

敵機はラバウル上空より右旋回し飛行場に爆弾投下し、ブイン方面に立ち去りました。飛行場方面には黒煙が吹き上がっています。

当時ラバウル基地内における海軍の兵力十万、陸軍の兵力三十万とのことでした。米空軍機による毎日の爆撃により日本海軍の航空機の被害も日増しに大きく

なっていたようです。

昭和十八年四月三日、山本五十六司令長官、宇垣参謀長以下、大分ラバウルに進出して来ました。今回の南下は直接作戦指導するためであり、連合艦隊司令部としては、大なる決意が必要であつたらしく、もし、この挙に出て満足する成果が上がらなかつた場合は、

今後は到底勝ち目はないものと見ていたようです。参謀長自身は、ソロモン第一線基地を回る腹づもりでいた様子、山本長官は「シヨートランドへ行くよ」と言っていたそうです。そのうち七日から十四日まで「い」号作戦を決行し、米軍のスケジュールを十日遅らせる戦果を上げましたが、わが軍も飛行機隊を一旦内地に戻し再建しなければならないほどの大被害を受けた様子でした。十二日から十四日まで、参謀長は Deng 熱にかかり入院しました。山本五十六長官は「参謀長は行かなくても俺は行くよ」と幕僚に話したそうです。十三日ごろ、視察計画ができて、同日、決裁され関係方面に戦略常用暗号書で暗号化し電波にのせて発信しました。

昭和十八年四月十四日、連合艦隊司令長官山本五十六大将が、第八海軍通信隊を視察にきました。通信室に続き暗号室と、非常に元気なご様子で私どもを激励してくれました。同日朝、一式陸攻二機に分乗、山本五十六司令長官一行は六機の零戦に守られてラバウル基地を南下しましたが、二時間後にはブーゲンビル島南部上空にて待ち伏せしていた十六機の P38 に襲撃され、長官機は全員戦死、参謀長と後二人の他は戦死の悲運に遭いました。長官戦死の悲報を受けたのは午後のことでした。ラバウル基地及び全艦隊においては半旗を掲げ、山本五十六長官のご冥福を祈りました。

八月に入りますと戦争も苛烈さを増してきました。内地およびブイン基地ニューギニア方面への船舶の航行も遮断されました。基地内においては、食糧事情の悪化、米機動部隊敵前上陸に備えての陸戦訓練、防空壕掘り、対戦車壕掘りなどに励みました。対戦車壕は敵の戦車を上陸と同時に壕の中に落とし入れ敵の戦闘力を一時にぶらせるための壕です。ラバウル海岸一帯を深さ一〇メートル、幅一〇メートル、長さ一二〇〇

メートルにわたって掘り抜くものです。

南国の太陽は日ごとに暑く照りつけるので、全兵力を投入したが暑さと疲労のためマリアアが続出してききました。途中、高砂族も加わって工事は完了しました。

食糧事情の悪化により、各部隊三〇人の農耕隊を結成し、食糧の増産に全力を上げました。まず、サツマ芋の生産に続き、製塩作業、椰子の実を利用しての椰子酒、椰子油、椰子セッケンなどを作りました。サツマ芋の早生物では三十日ぐらいで収穫できました。またラバウルには野生のパンの木、野生のウイスキーのなる木があります。住民はそれを食糧にしています。

燃料不足となり薪切りの当番となった昭和十八年八月、朝五時半起床、朝早くから気温も三〇度以上昇ってきました。吉村兵曹を薪切り班長に以下五人で結成、五人分の昼食米を炊事所へ取りに行き米三升、コンビーフ缶詰五個を頂きトラックに乗りココボ海岸方面の薪切り現場に向かいました。椰子の木立並ぶ海岸を右手に眺めながら、土民村を二カ所過ぎたころよりパイア、バナナ畑が続いています。

一時間ぐらいて現場に到着しました。初めての薪切りで様子が分からず、吉村兵曹の指導を受けました。

二人引きの豪州製のノコギリで大木を切り倒し、一時間でトラックに満載しました。今日は朝から吉村兵曹が食事当番で、昼食を用意してくれました。椰子の水で炊いた飯の味はなんとも言えずおいしいものでした。昼休みを二時間とって出発しました。途中土民村に立ち寄りパイア採りを楽しみ、夕方四時に帰隊しました。

ラバウルの基地においては、当直番以外のものは戦闘中ですが、上曜日になると外出が許されました。南洋貿易(株)に立ち寄り大福餅を腹一杯食べたことも、五十年前の思い出となりました。夜になると各隊ごとに故郷自慢の演芸大会などもありました。巡検が終わわり消灯になりますと、我々同期生同士でそつと部隊を抜け出し、風光明媚なラバウル海岸で涼み、南十字星の下、月を眺めながら、故郷のことを思い浮かべ語り明かしたこともありました。

内地と船舶が遮断されてからは便りもできず、俸給

も支給されず残念でした。しかし南国で眺めた満月は特別綺麗でした。昭和十九年十二月、爆撃や病気のため戦死者も続出し、遺骨を納めた白い桐の箱も数を増していきました。

昭和二十年二月十日午後十時、米機動部隊による艦砲射撃の急襲を受けました。ラバウル基地は猛射を浴びました。眼前で炸裂し黒煙が勢よく吹き上がります。同時に敵機三〇〇機ぐらいの大空襲を受け、敵機は爆弾を投下して立ち去りました。防空壕から外に出て見ると投下した照明弾で真昼のようでした。この空襲によりラバウル海軍航空隊は全機を失う大被害で、このころから日本海軍は衰退していきました。

昭和二十年三月、内地空襲、米機動部隊および航空艦隊は日本本土目指して北上していきました。

昭和二十年八月、日本海軍は機密書類、手帳などの焼却をしました。米機は「戦争は終結しました。日本軍は直ちにココポ方面に撤退せよ」というビラを毎日撒いていました。

昭和二十年八月十三日、政府はポツダム宣言を受諾

し、八月十五日、天皇陛下による詔勅の放送がありました。

昭和二十年八月二十日、ココポ方面第十団捕虜收容所に撤退し、一年八カ月の捕虜生活が始まりました。豪州軍の食器洗いや休養をしながら内地への帰還を待ちました。

昭和二十二年四月二十九日、ラバウル発の病院船「氷川丸」に乗船、五月十五日名古屋着、無事故国の土を踏むことができました。

昭和二十二年五月十七日、帰宅、四年八カ月の軍隊生活が終わりました。多くの戦友を失いながら帰還できたことに感謝しつつの戦後の生活も現在まで続いています。

【解 説】

第八通信隊「昭和一七年二月一日、舞鶴二特ノ通信隊ヲ基礎トシテ編成、内地ヨリ補充ノモノハ、昭和一七年二月二一日、横須賀港発。勤務地ハラバウル、一七年二月一日ヨリ三月三一日マデ、戦務甲。四月一日

ヨリ二〇年九月二日終期、「戦務甲」と旧海軍恩給加算調書に記されている。

筆者は、昭和十八年三月十九日、横須賀港発、三月十九日、ラバウル着、同月二十九日、第八通信隊入隊とあるから、戦況悪化の直前、特に山本連合艦隊司令長官戦死以降のラバウル勤務であるから、終戦までの労苦、さらにココボ方面第十団捕虜収容所で一年八カ月帰還を待ったのである。

ラバウル関係年表―抜粋

昭和十八年四月三日、山本連合艦隊司令長官「い」号作戦（母艦機をラバウル地区基地に展開して行う航空作戦）指導のためトラック発ラバウル進出。

同年四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六大将、機上で戦死（幕僚帯同）、陸攻でブーゲンビル島南のバレラに向かう途中、敵戦闘機の攻撃による。五月二十一日東京で発表。

同年四月二十一日、連合艦隊司令長官後任に海軍大将・

古賀峯一の親補発令。

同年六月三十日、連合軍、中部ソロモンのレンドバ島と東部ニューギニアのナツソウ湾に同時上陸。

同年七月三日、連合軍、ニュージョージア島上陸。

同年七月五日、コロンバンガラ島増援輸送部隊クラ湾夜戦。

同年七月十二日、コロンバンガラ島夜戦。

同年八月六日、ベラ海戦。

同年八月八日、ニュージョージア島方面防衛部隊司令部、コロンバンガラ島に後退。

同年八月十五日、有力な連合軍ベララベラ島上陸。連

合艦隊「第三段作戦（八月以降の作戦）命令」発令。

同年八月二十四日、陸海軍両総長、南東方面の作戦指導（ラバウル方面持久と後方強化）について内奏。

連合軍、チョイセル島（ブーゲンビル島西方）・モノ島（同南方）に上陸。

同年十一月五日、ブーゲンビル島沖航空戦始まる。

（五日第一次、八日第二次、十一日第三次、十三日第四次、十七日第五次、十二月三日第六次）。

第二艦隊のラバウル進出部隊（遊撃部隊）空襲によ

る被害甚大でトラック島引き揚げ開始。

同年十一月二十四日、マキン守備隊玉砕。二十五日、タラウ島守備隊玉砕。

同年十二月十五日、連合軍、ニューブリテン島南岸のマークス岬に上陸。二十六日、連合軍、ニューブリテン島西北端ツルブ地区上陸。二十七日、連合軍機約五〇機、ラバウル米襲（海軍戦闘機八十五機で迎撃）。

昭和十九年一月十日、連合軍、ブーゲンビル島の航空基地の使用開始。同月中旬、連合軍のラバウル空襲激烈化。

同年一月十五日、連合軍、ラバウル東方二〇〇キロのグリーン島上陸。十七日、米機動部隊、トラック島大空襲。三月六日、連合軍、ニューブリテン島北岸のタラセアに上陸。

同年七月七日、サイパン守備隊玉砕。八月二日、テナン守備隊玉砕。八月十一日、ガラム島玉砕。十一月二十三日、ペリリュー地区隊玉砕。十二月二十七日、レイテ島決戦。

昭和二十年三月二十一日、硫黄島部隊玉砕。

連合軍は要塞化された海空基地のラバウルを超越し、東部ニューギニア、西部ニューギニア、マーンシャル、マリアナ諸島を次々占領し、ボルネオ、フィリピン、硫黄島、そして台湾を封鎖しつつ沖縄へ上陸したのは昭和二十年四月一日、同島玉砕は六月二十三日である。このようにして本土はB29の爆撃下にあり、南方諸島やラバウルの陸海空軍は包囲下のうち、飢餓と病苦のうちに終戦を迎えたのである。

海戦に生き抜いた

看護、衛生勤務

静岡県 森田久吉

私の海軍軍歴の概要

昭和十四年六月一日、横須賀海兵団に入団、四カ月の厳しい新兵教育を受け、同年十一月海軍三等看護兵